

「虎」の名をもつ動植物

令和4年の干支は「寅」です。動物の「虎」は、日本に生息していませんが、中国など大陸からの影響を受け、日本の歴史にも古くから登場します。奈良県の高松塚古墳やキトラ古墳（7世紀末～8世紀初頭ごろ）の壁画には、神獣の二つに黒色のしま模様のある「白虎」が描かれています（写真①）。また、歴史書『続日本紀』には、715年の詔に、六位以下の官人が日常的に虎豹・龍の皮を飾ることを禁じ、朝廷の儀式に参加するときには使用を許すとあります。当時の日本では「虎」が特別な存在で、権力や護身の象徴であつたことがうかがえます。

ところで、動植物の名称に「虎」の字の付くものがあります。

「大虎杖」は、「オオイタドリ」の漢字表記です（写真②）。この植物は、各地で山菜や薬草として利用されてきました。市内でも山野や土手に群生しています。イタドリの漢字表記「虎杖」は、一説に茎が虎の模様に似ているためと言われています。また、和名「イタドリ」の諸説の一つには、傷薬の「痛み取り」から転じたという説もあります。オオイタドリが道端で繁茂する様子は、虎の勢いを感じさせます。

「獺虎」は、「ラッコ」の漢字表記の一つです（写真③）。ラッコの名称はアイヌ語に由来すると考えられています。アイヌのユーカラで「虎杖丸

の曲」と和訳される英雄叙事詩には、「石狩の河口に黄金のラッコが出没する。」というくだりが出てきます。野生のラッコの生息域は北太平洋沿岸で、最近では北海道東部沿岸でもよく目撃されていますが、石狩湾沿岸では知られていません。生息域ではない石狩川河口に黄金のラッコが現れるユーカラが誕生した背景には、中近世でもラッコ皮の価値が高かったからという研究者もいます。

「虎」という動物は、私たちの日常ではあまり身近な存在ではないかもしれませんが、ただけに性格や、しま模様の特徴的な姿は、長い歴史の中で護身の象徴とされ、動植物の名称の表記に用いられるなど、人と虎との深い関係性があることがわかります。寅年にあやかり、この一年が無病息災でありますように！（荒山千恵）



写真① 国宝キトラ古墳壁画の白虎
（写真は一部分）〈国（文部科学省所管）〉
〈画像提供：奈良文化財研究所〉



写真③ ラッコ／獺虎（北海道東部沿岸 2020年）
〈根室市歴史と自然の資料館 外山雅大学芸員撮影〉



写真② オオイタドリ／大虎杖（石狩市内）



石狩市学芸員
荒山千恵 Chie Arayama

専門分野は考古学。北海道での遺跡発掘調査をはじめ、出土した木の道具、音の考古学などの研究を行う。